

東京(首都圏)編 (5)

蜂谷 隆

大熊直人

神奈川の反戦派の

まとめ役

「クマさん」

「大熊さん」というと、197



0年代の党の会議で舌鋒鋭く執行部を追及する姿が目につかぶよ。フロントのある古い活動家に大熊さんの印象を聞いたらこんな話をした。僕は個人的(家族的)な付き合いもあったので必ずしもそういう姿ばかりが印象に残っているわけではないが、彼が亡くなった後に発行された『大熊直人さんを偲んで』を改めて読んでみると、「頑固」「真面目」「マメ」という言葉が散見される。実直と言ってもい

いが、自説を貫くタイプで、「調整型」が多いフロント派では、珍しいタイプだったかも知れない。70年代、80年代に神奈川のフロント派のまとめ役で自治労横浜市従労組反戦派の活動家として活動していた大熊さんは、多くの人から「クマさん」と慕われていた。

高校時代から左翼に

大熊直人さんは、1944年神奈川県茅ヶ崎市で生まれ、湘南高校を経て慶応大学に入学、1967年に日本経済新聞社に入社、69年に横浜市役所に転職、以後、自治労での活動のほか、「天皇制」、「狭山」、「本山闘争連帯」など神奈川の様々な運動の中心を担ってきた。91年に千恵美さんが亡くなり、わずか4年後の95年9月、大熊さんも51歳で亡くなった。反戦派の活動家として時代を駆け抜けたと

言えるのではないか。

大熊さんが、左翼に目覚めたのは高校時代である。60年安保は高校1年の時で、すでに活動を始めていたようで「藤沢駅頭で社会主義国の核実験の評価をめぐって、つかみ合いの喧嘩をしたこともあった」と自治労の中嶋滋氏が「自治労横浜」新聞に掲載された追悼文の中で記している。

大学時代は慶應義塾新聞(慶新)に所属し、自治会活動も担っていた。在学中の1965年に大学学費値上げ反対闘争が起ころ。学生服を着て三色旗(慶応の旗)を振っての闘いだっ

た。慶応大学には三田新聞と慶應義塾新聞があった。どちらも左翼的な活動家を中心だったが、ブンド。マル戦派が中心の「三田新」とフロント・構造改革派が主力の「慶新」という棲み分けがあった。この中で大熊さん

はフロント派系の活動家と人間関係をつくったのだろう。

大学を卒業し日経新聞に就職したが2年目の1969年に退社、横浜市役所の職員となった。70年安保闘争が高揚、横浜で活動していた大熊さんは「札幌への転勤」の内示を受けた段階で「地域の活動を大事にした」と退社を決意した。このあたりは『偲んで』で元毎日新聞記者の篤信彦氏が詳細に記している。

横浜市従労組員となり、反戦派として華々しくデビューしたようだ。『偲んで』によると「69年、横浜市役所入りたての時の『横浜市従反戦共闘』の集まりで(中略)悪びれずに『モサ』の居並ぶ中、激論にも積極的に参加」と書かれている。さっそうたる大熊さんの姿が目につかぶようだ。

当時、フロント派は地区ごとに街頭闘争を担う反戦青年委員

会が組織されていた。神奈川では横浜を中心に「京浜中央反戦」を名乗って活動していた。70年代に入ると党は解体の危機に陥るが、大熊さんは神奈川でわずか2人の「再建派」として残った。

家が生まれ育っていき、活動の場を広げたのが80年代だった。神奈川のフロント派は大所帯となったのである。

前野氏と交流

その後、レーニン主義青年同盟を残すかで党内は揉めた。大阪が「残す派」で、大熊さんも僕も「残す派」だった。ということで大阪の政治局員が上京すると新婚の我が家に泊まっていた。

他方で大熊さんは勉強熱心な活動家でもあった。70年代に市役所の活動家を集めてグラムシの『現代の君主』を読む会を月1回のペースで開催している。この時にチューターとなったのが前野良氏だ。約2年半続いたという。毎回、講義と質疑をテープに収め、その記録を市民向けのパンフにするという構想を持っていたが、活動が忙しかつたこともあって実現しなかった。

話を大熊さんに戻すと、70年代後半ころから労働組合活動に傾注する。自治労だけでなく横浜の書店(栄松堂)で正社員と非正規それぞれで労組ができ、電機メーカーで争議もあり、全国的にも注目されたと思う。また前述したように大熊さんは「天皇制」、「狭山」、「本山闘争連帯」などの旗振り役でもあった。団塊の世代を中心に次々と活動

もある。話していたのは子育ての話が中心だったと思うが、世界情勢や社会の動き、党内の話もあった。大熊さんが話して僕が聞くという役回りだったと思う。

E I)の編集も手がけていた。

『先駆』22年8月号で安藤紀典氏は「思い出の人びと・前野良(上)」の中で、「この『自主管理論』について(中略)大熊直人がもつとも熱烈な支持者で『どうして前野さんをもっと活用しないのか』と僕などに度々文句をつけたのだった」と書いている。当時、チェコの「プラハの春」やポーランドの「連帯」などで、自主管理社会主義論が注目されていたことが背景にある。

大熊さんは、この思いを『先駆』(1980年8月)に「私の意見」という形で投稿している。「不断に生み出される管理、支配、抑圧が現代社会の特徴であり、これを変革していくことを抜きに社会主義への道はあるのか」と提起、「党として大胆に自主管理社会主義の立場に立つことを主張したい」と述べている。80年代に入ると労働組合の現

場は徐々に疲弊していく。横浜市従労組は労戦統一をめぐる不毛な対立を繰り返していた。90年、主流派の共産党系執行部による全労連加盟を契機に分

裂、自治労横浜市従業員労組が誕生した。大熊さんは総務支部執行委員として分裂に反対し続けたが、最後は自治労を選択した。それから4年後、組合運動の第一線から身を引いている。その理由について本人は何も語っていない。千恵美さんが亡くなったことや労働運動に対する失望感などがあつたのかもしれない。

### 市民派に期待

しかし、世の中を変えたいという情熱を失ったわけではなかった。地域での運動も含めて模索していたのだろう。晩年は新しい運動の担い手として登場しつつあつた市民派に期待していたようだ。90年10月に東西両

ドイツが統一、翌91年12月にはソ連が崩壊している。日本では93年8月に非自民連立政権(細川政権)が成立している。世界と日本が大きく動いていた時代である。

恐らく悶々としていたのだろう。ちょうどその時に彼は痛の宣告を受ける。自宅に見舞いに行つた時だつたと思う。「蜂谷君、社会主義はだめだ。これからは社会民主主義だね」と言つた。大熊さんの口から「社会民主主義」が出てくるとは思っていなかったのが驚いた。実は僕も同じことを考えていたのだが、一歩踏み出せなかったからだ。

その後もずっと大熊さんの「社会民主主義だね」が頭にこびりついていて、それからしばらくして僕も同じように社会民主主義に転向した。大熊さんの後をついていったという思いがある。

大熊さんが亡くなってすでに27年経つが彼の評価は高くない。良く言う人が少ないという感じがする。『偲んで』でもある人が「葬式の帰りで参列者が必ずしも好意的に発言していないのを聞いて、意外な感じを持つた」と書いている。

つらつら思い出すと、大熊さんは物怖じせず主張し、意見の違いや対立をいとわなかった。客観的な物言い、解説調、上から目線という感じで、人の意見を聞くのがへただった。みんなの意見を聞いて落とし所を探す、つまりまとめることが苦手だつたと思う。だから「クマさんは……」という批判を受けることになつたのではないかと。

大熊さんのこうした面は、彼の個性かも知れないが、新左翼の活動家は多かれ少なかれこんな感じだつたように思う。大熊さんの生き様はある意味我々の生き様でもあつたのだ。

もし大熊さんがその後も生きていたら、彼は何をしたらだろうか。『偲んで』には「大熊さんは密かに茅ヶ崎市長になることを夢見ていた」とか、『新しい政治』を指しての『ローカルパーティー』やシンクタンクの形成に着手したいと言っていた」といった記述が見られる。政治家を志向したかも知れない。この選択はあり得ただろう。

でも僕の見立てはこうだ。2004年で彼は定年を迎える。茅ヶ崎の地で介護など福祉や子ども食堂みたいな地道な地域活動をしていたのではないか。彼のそれまでの活動スタイルなどからするとかなり距離があるし、性格的にもあわない面もあるが、好々爺となつて地道な活動を続けたのではないか。何となくそんな気がする。

### 『先駆』10月号を読んで

前号に続いて掲載論考を素材に、「働く・仕事する」視点で取り上げ、私がこれまで棚上げしてきたことを深めたい。

〈視点「教員の長時間労働」に不当判決〉人間らしい働き方を全ての職場に、はこの国の共通認識だろうか? 教育の現場にも職種は様々、雇用形態も様々、その賃金差は妥当だろうか? 時間外労働不払いに終止符を打つには、少なくとも教育現場で働く様々な職種・年齢による賃金格差も課題とする覚悟が求められる。

〈論考 田間読書ノート 社会主義論の見直し〉このシリーズ昨年11月号が1稿で6稿目。これまでも私自身の歩みを確かめながら目を通してきた。本稿冒頭の4冊手にしたことはある

が、今も書棚にあるのは「非営利・協同セクターの理論と現実」のみ。

〈連載 社会↑↓森林を考えろ①〉第1回目のサブタイトル「ソーシャル&グリーンとしての里山・里海」。19回大会政治宣言「ソーシャル&グリーンを基調に、対抗社会への挑戦をめざそうの、一つの展開として読んだ。次号以降にも期待!

今号で「働く・仕事する」に関連して3論考を取り上げた。この10月労働者協同組合法が施行された。協同総研所報「協同の発見」誌358号(2022/89)に「定款参考案」「労協法Q&A」等が特集されている。私自身が設立運営に関わつた高齢者協同組合でも正規職・非常勤職区分がある。

資本主義・資本制生産の分析。検討を前提とせずに、仕事(生産)すること・よりよき生活を創ることを考えている。前号でも触れたがILO同一価値労働同一賃金を、この国の政権も経団連・経済同友会・商工会議所も受け入れない。民間・公務を問わず「仕事(職務)」による賃金(収入)差「アウトプットによる賃金(収入)差」があるのが現実だ。同じ生産・サービスに携わる現場で働く者同士(いわゆる管理的職務も含め)の賃金格差無用から考えたい。まずは、働く者同士で事業運営する協同労働の現場で、事業立上げ・運営の土台に据えられないだろうか?

(柝倉幸一)

新潟 編

蓮沼 勝男

江川 弘

不屈の政治家

ら34年ぶりの再会で、江川さんはすでに71歳であつた。

反代々木少数派で  
共産党離党

私が江川さんとともに活動したのは9年間で、主に新潟大学での大学革新運動の時代である。従って、江川さんを語るには、もっぱら自身の言葉から引用するしかない。

2003年、統社同の歴史を残すためとして、朝日健太郎・安藤紀典両氏が江川さんと再会、「江川さんのこれまでの活動や考え」の聞き取りと対談を新潟で行った。江川さんが離同盟(後で詳しく述べる)してか

江川「私は統社同の創立には直接かかわってはいない。60年安保闘争の後の62年、結成大会があつたが私は参加してはいない。第2回大会(蒲郡大会)には参加したが、結成大会のあとすぐ新潟の統社同を結成した。その前は現マル派(現代マルクス主義研究会)ということで、

反代々木の少数派だ。佐藤昇、長洲、井汲各氏と、それが安仁までつながっていた。共産党員でありながら、新潟にその人達をみんな呼んだわけです。当然、代々木の指導部に問題にされたわけですが、それなら『共

産党をやめる』となつた。新潟大学の共産党細胞の創立に關わっていたので、『俺がつくったんだから俺の責任でぶっ壊す』といつて解散した。それで離党届を書いた。離党した多くは4年生で卒業していなくなつたが、教育学部は残っているのでもっぱらそこへ行った。その頃、統社同の創立大会をやつたと安仁から知らせがきて、よし我々もやろうと第2回大会に出て、全国政治となつたわけです」

「私らは、『現マル』を思想としたつもりで党内闘争を闘つたわけ。一つは議会を通じて変革してゆこうということを初めて問題にした。暴力革命に対して議会を通じた変革―民主主義の評価によつてそれが可能である

と。二番目に、日本は半植民地国、従つて民族独立革命に対して我々は、日本は高度に発達した資本主義国だと、従つて社会主義革命。三番目には前衛党論に關すること。複数前衛党論ということまではつきりしないが、我々は考えなくてはならないという立場。これら三つの点を軸にして党内闘争をやつたわけです」

江川さんは「新制中学校(現在の新潟高校)の時から共産黨員で、学内で活動していたんだ」と言つていた。それから新潟大で、新制大学の第一回生。

江川「僕らは共産党細胞のトップで入学して、そのあと東北大へ行って東北大闘争、新潟ではだから闘争がない。この頃レッドパージが起こる。当時、

僕は代々木反対派に立たされてね。50年の全面講和闘争とか……。あの頃はもう全学連、東北大の闘争は全部旧制の高校、私らの先輩。僕らも新潟大にも全学連を作つて初代委員長になつて、しょつ中東京へ行った。当時で言えば反中央、その後すぐ官本派になつて、そんなことで初めからの党内闘争だった」

朝日「江川さんは全学連世代の中心だつたわけですね」

江川「東京へ行くと、しゃわれ声でアジっている奴がいるなと思つたら沖浦和光さんだ。あの時私らは共産党本部を占拠するんですよ。その時朝鮮戦争が始まつて、非合法活動に入る。激しい暴力闘争の方針になつて、その当時は暴力闘争主義ですよ。当時共産党が中核自衛隊というのを組織していた。僕は中核自衛隊ではなく宣伝隊で、

そいつらの先頭に立つた。新潟

の白山公園の近くで、我々が機動隊に向かつていくと、機動隊がワーツと突つ込んでくる。プラカードの板を抜いて棒で立ち向かつた。しかし機動隊にはかなわない。そういう闘争を通して、こんなもんじゃどうしようもないということになつてゆく。そういう時期がありましたよ。ある時期、武闘派でしたよ。俺は知性と教養の統社同だから、現マル派に行つたが、蓮沼たちはそういう経験を経ていない。純粹の構草だ」

朝日「同じことを繰り返しているんですよ。江川さんもあの当時(68年・69年)僕らに、そんな馬鹿なことをしても変わらななんだと、言つてくれていたら違つたかもしれない」

新潟の大学革新運動と「構造改革」

江川さんは、65年『現代の理論』で16頁にわたる「現代革命

と構造改革」と題して、自身の「革命論」を提唱している。「私は構造改革路線とは、資本主義社会の内部改造を通して、社会主義に接近してゆく革命方法である。資本主義社会の構造内部に直接民主主義の装置を生産してゆくことである。我々が作りあげた装置が、政治社会と市民社会の中で敵が築きあげた陣地を破壊しつつ、新たに我々が作りあげてゆく陣地である」

江川さんの理論の特徴の第一は、我々の戦いは「陣地戦」であるということ。現在は「物理的意味」の権力との戦い、すなわち「機動戦」ではなく、権力を支えている岩盤もしくは権力の一部分を構成している広汎な陣地を破壊しつつ闘いを進めることである。60年代の新潟における大学革新運動は、知的生産の場としての大学(支配的陣地)を我々の陣地に変えてゆく運動であつた。

学生の大学運営への『参加・介入』開始

当時、新潟大の最大の課題では「大学の移転と教育学部の統合」であつた。新潟大学は、49年新制国立大学として発足した。新潟市に医学部・人文学部・理学部・教育学部本校と、ほとんど旧制の校舎をそのまま利用して発足した。教育学部は三市に分割、今まで師範学校があつたから大学を置きたいという地域利害に妥協した結果であつた。真に総合大学たらしめるために、全学部の統一キャンパス、そのための移転の必要が、早くより大学関係者によって切実な問題とされてきた。

これが具体化されたのは、62年文部省が全国72の国立大学に対し、「木造老朽校舎長期整備改善に関する五期20年計画案」を提起し、新潟大学側の構想を求めてきた63年4月である。大

学では「総合施設計画調査会」が設置され、65年に新潟市に全学協統合することが決定された。しかし移転地が新潟市に決定してからも、長岡市・高田市では統合移転には絶対反対の運動が猛烈をきわめ、地元選出代議士を通じて統合阻止のための中央への働きかけが活発になつていった。

圧倒的多数の学生(94%)がこの統合に賛成していたのであるが、統合計画は学生・一般職員はもちろんのこと、教官の意志すら十分に反映されず、学長・評議会と最高事務当局の間に、きわめて事務的「行政的」に進められていた。統合・移転と総合大学の具体的イメージは少しも明らかにされず、教官・職員組合からは、そういう進め方に対する批判の声はあがらず、傍観するのみであった。

批判の火の手は、大学革新運動を追求していた生協と新大新

聞会と教育学部自治会を中心とする学生より上がった。これらの学生は、みずからの運命を決める事態が、学生と全く関係ないところで進行していることに對し、全学に注意を喚起した。65年の大学祭に、伊藤学長の講演「新大の未来像の展開」の企画によつて、暗闇の中で行われていた統合・移転計画を学生の前に公開させ、それをめぐる論議をよびおこすことに成功した。

そして、大学祭の成功をもとに、大学祭直後に統合移転問題全学協議会(全学協)が発足する。全学協は、学生は「大学の自治の不可欠の構成要素であるがゆえに、統合問題をはじめとする大学の管理運営問題に参加介入せねばならない」と宣言したのである。

### 政治家の公然たる干渉と学生の戦い

### 全学ストと直接民主主義路線の創造

68年3月に教養部の着工が決定された。「亘私案」闘争以来鳴りを潜めていた学生は、再度決起した。「教養部の単独移転反対」等の要求で立ち上がり、まず学長との大衆団交を開始した。学長卒倒「事件」を起したのはこの時である。

この直後、学生はついに全学ストを決意した。全学ストは困難を極め、工学部教養課程のみが教養試験ポイコットに突入、他学部の教養部の一部もクラス決議でポイコットに加わった。「稲葉私案」「亘私案」以来の闘いの蓄積は、夏休み前の七月に一挙にエネルギーが噴出した。学長は健康を理由に大衆団交を拒否、替わつて学生部長交渉を行う。学生部協議会は、本国会議室で開かれていたが、学生はここを包囲し詰詰にした。夏休

65年度は移転地の青写真の決定により、それを実現する予算獲得段階に入った。学長は文部省に出向し、大蔵省概算要求の中に新大統合移転予算が入っていることを確認した。ところが、当時の自民党幹事長田中角栄(長岡市三区選出)と中村文相が相談して、この予算にストップをかけた。

こうした事態の中で、自民党政調会文教部長稲葉代議士(新潟二区選出)による「稲葉私案」なるものが登場する。この「私案」は、高田市に教員養成のための単科大学を設置し、長岡市に工業単科大学を設置するという内容で、大学が賛成してくれば、予算は復活させるといふものであり、外部勢力の政治介入である。学長は予算獲得のためには、この案をのむしかない

と政治的判断を行った。圧倒的に不利な状況下で、全学協は闘いを開始した。全学協

は全学の真剣な討議を要請、教育学部自治会は、全学協の協力で連日のクラス討議を基礎に、学部長・教授会に対する大衆行動を開始。教育学部教授会に對し、教育自治会は大衆動員をかけ「教授会への学生の参加(傍聴・発言)を認めよ」と教授会場入り口で激しいやりとりの後、傍聴は認められなかったが、教授会の前には会議場にて「稲葉私案」に反対。統合移転に関する決定は、全大人(教官・職員・学生)の手によつて行われるべきである。学生の参加と同意なしの決定を一切認めない」と。教授会の会議中、学生は廊下に移動、教授会は白熱的討議の末「稲葉私案」を承認しなかつた。又、理学部教授会も「私案」に反対決議。これらの結果、評議会は「稲葉私案」には相当な異論があると、「私案」を拒否した。

しかし、その後も国会議員や

みが迫っている中、評議会の詰話を解くかわりに、全学ストと結合して本部を封鎖する方針を決定。占拠は続行、ほとんどの全学部でのクラス討議で授業はストップした。教養部教授会も学生に刺激されて、「教養部の移転延期」を決定した。学生たちは、夏休み明けの闘争体制を維持する占拠を続行する。本部だけでなく、各学部闘争委員会

が、それぞれの学部校舎を占拠することになる。大学における細胞は、工場におけるそれが職場であると同様にクラスである。クラスの意志を結集し、全学生の意志に結集してゆく。こういう「直接民主主義的組織路線」の創造を新潟大学の学生運動は開始しはじめている。学生大会という形式主義を打破し、クラスから始まりクラス代表者会議をもつてことを行う方式に転換すべきである。

以上は、江川さんが『現代の理論』67年、68年に掲載された「新潟大学の統合移転闘争と自治革新」から「構造改革」に関するところを要約的に記したものである。

当時は、我々は運動の前線で闘っていたので、闘いの記録などは作る間もなかつたが、江川さんは非常に詳しく、客観的に記し、かつ自身の評価をしている。

江川さんにとって、新潟大学の大学革新闘争は構造改革(革命論)の、実は「実験」であったと、後日述べている。

①大学という敵の陣地を味方の陣地へと変えてゆく展望、「陣地戦」。

②敵の陣地へ参加・介入し、我々の直接民主主義の「装置」へと変革する闘い。自主管理への展望。「参加・介入」の闘い。

③「クラス」を単位として直接民主主義の装置へと変えてゆく



くこと。企業では職場単位となる。以上。

江川さんは、「常に的確な情勢分析と基本的な方向を指示してくれる」影の指導者で大学本部での大衆団交をはじめ、その時の場面で『的確な指示』が有効に働き、運動を大きく前進させたのであった(石川氏)私の一年前の教育学部自治会委員長で統社同学生支部長)。

江川さんは、会議で自分の意見をめつたに言わない。運動の総括会議でも参加者全員はまず、個人的意見として、思っていることを言い、江川さんはその発言に耳を傾けるだけであつた。そして参加者の話し合いの中からヒント(方向・方針)をみいだす。そして方針としてまとめる、ないしは指示する。

大衆の要求は何か、変革の力は学生の要求と闘いのエネルギーにあるということが信条であつた。それを会議の参加者の

発言からくみ取るといふことが、指導の最大の特徴である。

### 全共闘運動の敗北と 江川さんの離同盟

教育学部自治会を担ったのは、私と同学年の活動家を中心で、彼らの卒業と世代交代の中で、これまでの運動は停滞しつつも、全共闘の始まりと高揚を迎える。学生フロントは闘いの主導的役割を持ち、新潟市の体育館で2000人規模の学長団交に成功したが、県警機動隊の大学封鎖解除、そしてその後の方針の行き詰まり、党派を中心とした「安保沖繩」の街頭闘争に移ってゆく。

江川さんは、全共闘運動をまのあたりにして、私に「大学革新運動は全共闘運動に乗り越えられた」と言ったことがある。私見であるが、全共闘運動の全学ストと全学部封鎖で大学当局は何らの対策も対抗策も出せない

いマヒ状態になった。我々の大学革新は、そこまでは至ってなかつたからである。

また、江川さんは70年の安保沖繩闘争には、学生・青年の街頭闘争にも理解を示し、私と一緒に上京したこともあつた。しかし運動がセクト間の対立や街頭闘争の急進化になると批判的になってゆく。「大学闘争に敗北し、これからどうするかという時に、『共革党(日本共産主義革命党)』ができた。私らが『現マル派』としてやってきたのは全く逆の方向、いわゆる先祖返りと思つた」。地区委員会の席上「現在は権力打倒の局面ではない」と「先駆」方針を批判し、その直後、離同盟届を出した。

### 江川さんの不屈の魂と 30年後の再開

レーニンに対しても、マルクスに対しても疑問がある。だから

らしい組織を構想していけないだろうかというのが僕の理論。昔の仲間から、まだそんなことをやっているのかと言われるが、これをやらなければ死ぬんじゃないかと、そういう心境に変わってきたのは19回大会の政治宣言だ。

### 江川さん 生活と そこでの活動

江川さんの生活の糧は競馬新聞の予想家(記者)で、学生時代からのアルバイトである。「早朝から馬の調子をみて、競馬の予想では自信があつた」と言っている。

「午前中で仕事は終わるので、午後は大学等で活動ができるからである。競馬の仕事では従業員の自発性を求めるために自主管理などをやつて職場は非常に活発化した。金は稼げるし活動もできるといふことでやっていたが、同盟をやめれば全然意味

ら運動を通して作つて行こうというところで、大学革新運動・構造改革をやつてきたが、またレーニン主義に戻つた。俺は何をしてきたんだという気持ちで、それから何年かは虚脱状態だった。一つピシヤときたのは

巻原発の住民投票の勝利の時、いわゆる市民派の運動。俺達はこのことをやろうと思つていたのではないかと、そう思つていたところに一回目の新潟市議選、栃倉選挙。99年栃倉さんを支えて市議選に臨む中、27年ぶりに私と石川さんと江川さんに再会し、ころよく選挙の協力を約束してくれた。06年に江川さんは77歳になるといふことで、小川さんを中心にして「喜寿の会」を開催、新潟大で自治会や生協で活動していた20人余りが集まつた。「江川学校の同窓会の気分になって、集まつた顔ぶれを見て、統社同がズラツと居るわけ。30年の空白が

で、ここでも住民運動のリーダーの一人として活動した。

14年初頭に転倒して救急搬送されてから何度か入院を繰り返して、21年89才で死去した。晩年は栃倉さんが介護士の資格もあり、時々再会し支えてきた。

江川さんは、旧制中学校時代から活動をはじめ、共産党を離党。新潟大学学生運動の高揚期を指導するも、70年共産党を離党、その後の27年間我々には江川さんは忘れられた方だったが、困難の時でも、社会からきれず、与えられた条件の中で変革を試み14年の転倒入院まで75年間(89才)不屈の魂で生き抜いてきた。中でも同盟19回大会の「ソーシャル&グリーン」の宣言は、(当時)絶大の励みになったのである。

三人の対談の時、江川さんは71才、34年ぶりである。「あ

は新居マンションに関わるもの

## 《投稿》

# 大熊さんのこと、私もひと言

石平 正己

前号の「統社同フロント60年  
思い出の人々」欄に大熊直人  
さんが取り上げられていた。大  
熊さんといえば理論家・インテ  
リ・センスのいい都会風な人と  
思っている人が多い。事実その  
通りで、先駆に載った写真もイ  
ンテリ顔である。

だけど大熊さんは、慶応大卒  
だが、およそ慶応ボーイとは思  
えない生い立ちで、それが彼を  
支えていた。彼は茅ヶ崎の部屋  
が一つで台所とトイレがあるだ  
けの借家（関西では文化住宅、  
関東では家作、さして一部では  
マツチ箱）で、東大卒だけど重  
い病気で寝たきりのお父さん―  
早くに亡くなられた、しつかり  
者のお母さんという中で育つて  
きたのだ。どうして知っている  
のか？。

それは、連れあいを亡くされ  
た頃、私が茅ヶ崎の大きな新聞  
店の店員で、早朝、実家の借家  
に朝日新聞を配達していて、お

母さんに出会ったのだ。あまり  
にそっくりで驚いたが、口が勝  
手に「市役所の大熊さんのお母  
さんですか？」と言っていた。  
そのときお母さんから、ずっと  
ここに住み続けていること、大  
熊さんもここで育ったこと、早  
くに亡くなったお父さんのこ  
と、周囲の人が東大進学を勧め  
たのに『師事したい先生がいる』  
と慶応に行ったこと、勤めてい  
た日経新聞をやめて市役所に転  
職したことを教えてくれた。

私は活動をやめて（やれる状  
況ではなく）田舎の母のことを  
思いながら、せつせと住宅ロー  
ンを返済し、自分の頭で今度こ  
そ新しい人間解放の思想と道を  
見つけようと読書していた。誰  
とも付き合っていないかった。そ  
れがあつて思い切つて大熊さん  
と連絡を取り、ごく短期間だ  
が、辻堂の公団にもおじゃまさ  
せて頂いた。

想像通り、一万冊は超えそう

な本、美術にも造詣が深いこ  
と、本当のインテリの顔とそれ  
を支える民衆に根ざす心をいつ  
も知ることがある。これからこ  
の出会いで私も変わるのか？  
と思つたところで突然の死で  
あつた。

その直後、そっくりな顔のお  
母さんの住んでいた家作は取り  
壊され、隣に大きな鉄筋コンク  
リートのアパートができ、そこ  
へ引越された。毎日の配達の時、  
顔を拝見できるとうれしく、  
かつ連れあいに続いて最愛の  
息子を失なわれたことを思い、  
私は田舎を思い出ししていた。  
お母さんは私はひとりでも  
生きるよ、と語ってくれた。  
そっくりなインテリ顔で。大熊  
さん、お母さん、今も心の支え  
です。

大阪編 6

丹羽 通晴

・社会主義理論政策センター

あつたに多士済々の集まり

準備会に終わった  
統一労働者同盟

今回は、大阪編の冒頭で書いた小寺山康雄(および大森誠人)のその後、あるいは番外編というところだろうか。人物伝ではなく、とある団体の話になる。1969年11月に統社同を除名された(本人的には離脱した)小寺山さんだが、政治活動から離れる気はさらさらなく、統一労働者同盟を結成(70年5月)する。メンバーは統社同以来の旧い人たちもいたが、小寺山世代やそれ以下の統社同経験のな

はもういいだろう」と言っていたが、小寺山さんから「付き合ってくれ」と言われてグラムシ研究会をやっていたらしい。このあたりの事情については、残された書類が皆無なのでよくわからない。事務所も阪急東通商店街界隈にあったと思われるが、それ以上のことは不明。この当時に統社同に参加していた若手メンバー(私より少し年長)に問い合わせしてみたが、「六甲山で夏季合宿をやっていた記憶くらいしか残っていない。年長の人(小寺山世代)にも聞いてみたが、関係書類は処

分してしまっただし、記憶のほうも同じように飛んでしまった」という程度しかわからなかった。小寺山追想集に載せた三左子夫人(三左子さんも2022年7月に亡くなった)の経歴文には「全共闘運動の先鋭性はみとめつつもグラムシの思想や構造改革を追究する。しかし党派闘争や内ゲバに統社同の大人たちは嫌気をさし徐々に撤退。統社同は準備会のままとなる」とある。

社会主義理論政策センター

統社同の、ある意味で雌伏の時代を経て社会主義理論政策センターの設立へと至る。これ以下の記述は、ほぼ『滄海の波紋』(大森誠人・大森英子遺稿・追悼

集)によっている。この中で大森さん追想座談会は3部構成で、社会主義理論政策センター設立にかかわる話は最後の大阪市政調査会時代のことになる。70年代初頭に同対審共闘が起き、反差別の部落解放運動が大きく盛り上がる。この時期に全電通・柴田範幸、大阪市職・鈴木美雅、大教組・中川督之助の各副委員長がよく集まって今後の方向について話をするのがあり、それに社会党大阪府連の荒木傳副委員長が加わって、センターの設立へと動く。この副委員長の会は「へその会」と呼ばれていた(小寺山さんの回想)。

社会主義理論政策センターの設立は77年5月。呼びかけ人は山崎春成、熊沢誠、中岡哲郎な

ど5人の研究者で、事務局長に荒木傳さん、専従の事務局次長に小寺山さんが就任する。柴田さんの回想によれば、この「へその会」を仕組んだのが大森さんとのこと。ただし、ご本人は72年に脳腫瘍を発症して手術をし、75年に2回目の手術をしていて、この構想が具体化する過程で大森さんが小寺山さんを引き入れたようである。大森さん自身は常任理事を務めた。

社会主義理論政策センターは毎月、PLP会館で例会を開催し、その講演録をベースに月刊誌『社会主義と労働運動』を刊行。会員数1200人、研究者300人を数えるまでになる。ただし、小寺山さん自身は88年、「社会主義連合」に向けた活動をするために専従を辞任するが、その後も常任理事としてかかわりを持ち続けた。97年7月に「社会主義と労働運動」の最終号を出して、社会主義理論

政策センターは21年間の活動に終止符を打つ。

中岡さんは「ぼくは社革の革命党真にどうしてもなじめなかったので、統社同、社会主義理論政策センターと運動のスタイルが変わって行くにつれて、なじみができて行った。その最後のやつに最後まで腰をすえたわけですが、ほんとは大森も理論センターが一番あつてたんじゃないかと思う」と回想する。小寺山さんは、統社同以来の大きな財産である学者の活用スタイルや、もっと広いつながりをつくる構想として社会主義理論政策センターを位置付けていたようだ。

その結果、統社同以来の活動家と社会党の構造改革派とよばれた人たちの共同戦線として多彩な活動が生み出される。「部落解放、障害者雇用、在日韓国・朝鮮人の雇用と差別の問題、また新左翼、反戦青年委員会など

ラジカルな運動、そういう時期に労働組合も問題が問われました」と柴田さんが回想しているが、そのひとつの答えが社会主義理論政策センターだったのかも知れない。この理論センターの例会ではさまざまテーマが取り上げられた。その意味でも多士済々の集まりだったと思う。ヨーロッパの緑の党、ユーロ・コミュニケーションズ、第三世界論などの動きに早くから着目していたし、在日朝鮮・韓国人自身の労働組合「高麗労連」も結成間もない頃に月例会に招いていた。このあたりは小寺山さんや大森さん自身の関心もあるだろうが、この当時の労働組合のリーダーたちも時代の変わり目に敏感に反応しようとしていたのだと思う。

いくつかのヒストリー

私自身は79年に小寺山さんと出会い、理論センターの会員に

なる。ただし、事務所にはたびたび顔を出し、小寺山さんと酒を飲む機会が多かったが、例会にはせいぜい2、3カ月に1回出席するかしない程度の不真面目会員でしかなかった。理論センターの役員とも遭遇することはあつたが、誰が元統社同かどうかはわからなかったし、末端会員では親しくなる機会もなく、「統社同の末裔の者です」と挨拶することもないままに終わった。だから、語るほどのヒストリーの持ち合わせはない。そのなかで研究者として呼びかけ人の一人であった沖浦和光さんについては、フロント派としても合宿に何度か来てもらったり、統社同の40周年・50周年行事にも参加されたりで、馴染みが深いように思う。ただし、安藤紀典さんが『先駆』で沖浦評伝を連載し、冊子化もされているので、詳しい話は割愛する。

社会主義理論政策センターの  
結成15周年のとき、中国から研  
究者数人を招待しての記念イベ  
ントが持たれて、私もホテルに  
泊まりこんで手伝いをさせられ  
た。その歓迎パーティーの直前  
に、小寺山さんが沖浦さんに

「中国人の白髪三千丈の大ホラ  
話に對抗できるのは、沖浦さん  
しかないのだから、よろしく  
お願いします」と言い、沖浦さ  
んも大様に「よっしゃ、よっ  
しゃ」と返事していたことが思  
い出される。

教組の担当理事（と思うが）  
に市川正昭さんという人がい  
た。年齢的には大森さん世代で  
はないかと思う。80年代後半  
頃、教組としては連合への参加  
を決めていた。市川さん自身が  
それをどう考えていたかはわか  
らないが、あくまで連合に反対  
姿勢を崩さない小寺山さんに対  
して「やっぱりあかんかなあ」  
と寂しげに語っていた姿が印象

に残っている。だからどうとい  
うことではないのだが、理論セ  
ンターのなかで若手の（した  
がって連合に対しては批判的  
な）集まりになぜか市川さんが  
珍しく姿を見せていたのが、不  
思議な感じがしたものである。

理論政策センターとは直接に  
は関係のない話だが、少し年長  
の自治労の元幹部に聞いた話。  
統社同のメンバーは社会党の人  
たちと仲よく活動し、場合に  
よっては社会党に加入したメン  
バーもいたと思われるが、もと  
もとの社会党の人は統社同の人  
を「元共（もときょう）」と呼  
び、統社同側は社会党員を「民  
同」と呼ぶことが多かったらし  
い。それが単なる冗談口調なの  
か、辛辣な侮蔑表現だったのか  
までは判断できないが、それぞ  
れに思えば複雑だったのかも知  
れない。

## 「脱原発情報」

### ——最近の原発関連情報から

大手電力3社に

課徴金1000億円

事業者向け電力供給めぐり、

大手電力会社が互いに顧客獲得

を制限するカルテルを結んでい

た疑いがある問題で、公取委は

12月1日、中国電力、中部電力、

九州電力に対し、独占禁止法違

反（不当な取引制限）で総額約

1000億円の課徴金納付命令

を出す処分案を通知した。

関係者によると、課徴金は中

国電700億円超▽中部電と販

売子会社「中部電力ミライズ」

（名古屋市）に計約275億円▽

九電約27億円。公取委は今後、

各社の意見を聴いたうえで、今

年度内にも行政処分を出す方

針。一方、カルテルに関わった

疑いがある関西電力は課徴金減

免制度に基づき違反を事前に自

主申告、課徴金は免れる模様  
だ。（12月1日 朝日デジタル）

オランダ、35年までに

原発2基新設へ

オランダ政府は12月9日、35

年までに原発2基を新設する方

針を明らかにした。国内の全電

力中最大13%を賄う予定で、着

工は28年。同国は40年までに電

力のカーボンニュートラルに到

達することを目指しており、原

子力発電がエネルギー移行で重

要な役割を担う必要があるとい

う。昨年に再生可能エネルギー

が全発電に占めた割合は12%

だった。政府は今後10年のエネ

ルギー移行に350億ユーロを

抛出予定で、このうち原発新設

分として先に50億ユーロ（53億

ドル）を確保している。

（12月9日 ロイター）



# 統社同・フロント60年 思い出の人々 ⑭

## 大阪編 7

丹羽 通晴

### 柴田 英男

#### 8中総整風後の フロント大阪を牽引

建大会で中央委員に選出。77年春、上京。87年春、帰阪。以降、

大阪・関西を中心に活動。89年2月6日、心不全のため急死。

#### 70年闘争の 申し子のようにな…

柴田英男、愛称はモス。1946年12月、大阪で生まれる。

65年に関西学院大学商学部に入部。67年春より、ベトナム反戦、学園闘争の高揚の中で学生運動に身を投じる。68年から70年春、関西全共闘で活動しつつ、関西のフロント派学生運動の中心メンバーとして活躍。72年、わが党の危機に際し、関西地方委員会の中心に。74年、第10回党再



以上は追想遺稿集『今宵モスと酔いしれて』（偲ぶ会、90年刊）の「柴田英男略歴」からの抜粋である。編集したのは安藤

紀典さん。当時はモスも含めて「政治連合」をめざしていたからか、追想を書いたのは党派に属さない人や他党派の人たちも多く、松江澄さん（統一労働者党）、高木仁三郎さん（原子力資料情報室）、上坂喜美さん（三里塚闘争に連帯する会）、渡辺勉さん（全国一般南部支部）といった多士済々。『話の特集』の矢崎泰久さんまでが書いている。その中で松江さんが「周旋の才」と表現したのはじめ、人と人との「つながり」などといった褒め言葉が並ぶ。お世辞もあっただろう

（矢崎さんの追悼文がそれ）からすれば、それもわかる気がする。

が、広島市の反戦・反核集会（84年）の実現や中山千夏選挙（86年）での奮闘ぶり

私にとつても旧知の石井俊二さん（関西新時代社、彼もつい最近亡くなった）や五十嵐守くん（京都工人社）も書いている。なかでも石井さんの追想は、入管闘争華やかなりし、ついではたがいの党派関係もシビアな頃のこと、大激論になって「やるのか！」と大声をあげて双方が机をひっくり返したら、中核派が割って入ってきて「内ゲバはまずい」と言ったという一幕。これは大阪でやった偲ぶ会での（笑い）話だったと思う。

モスというニックネームの由来も、大学の1年後輩が書いてくれている。ともに音楽研究会において、その音研が所属してい

た文化総部の内部で民主化運動がはじまり、音研はその主導権をとるようになる。それと並行して学園闘争の波が押し寄せ、権力との関係からそれぞれのメンバーにあだ名をつけて呼びあおるようになった。当時のモスは体重が45kg程度しかなく、まさに蚊のようなイメージで、そこから「モスキット」と命名され、それが略されて「モス」と呼ばれるようになった。

### 官僚的な奴

追想稿集では、現役のプロント派はあまり登場せず、議長である朝日さんを除けば、東京からは奥脇保さんと近藤美恵子さん、大阪の阪野修さんと兵庫の涌井徹さんだけ。なかでも関西の2人(当時の表現では側近的立場だったのではないか)の評価は辛辣で、阪野さんの書き出しは「とにかく官僚的な奴、というのが彼の印象でした」と

ある。会議をしていて、最終電車が過ぎてしまった。会議の度ごとにそうで、「彼の近くにいればいるほどその被害を被る」という関係でした」と述べている。涌井さんも「嫌な奴やな」という当時の感触を率直に書いている。

最終電車が過ぎてても会議が終わらない事態は、私も体験したことがある。府委員会だったと思うが(私はメンバーではなかったが、なんとなくそこに入った)、何の議論をして何をめぐつてもめていたのかはまるで覚えていないが、延々と早朝まで会議が続いて、ほとんどのメンバーはそのまま出社するということがたびたびあった。私は学生だし、モスは専従(専従費は出てなかった気もする)だからいいが、勤め人は大変だなど思った記憶がある。

この当時のモスは大阪府委員会の委員長だったはずで、彼のパーはいなかったと思うから、風土の違いも大きかったのかも。あるいは、8中総後しばらくは組織再建が第一の課題で(現場を持たないモスのような立場ならとくにそうだろう)、彼が東京に行つて以降によく共同の行動や事業企画なども対象となり、モスもそれらに対応しようとしていたのか。そのあたりのことは、むしろその当時に付き合っていた東京の人たちの意見を聞きたいものだ。

よく覚えているのは88年に開催された「12月フォーラム」のときの話。このときには帰阪していたが、このイベントのために1カ月ほど上京して事務局活動を担っていた。当日のモスは受付にいて、それを目撃した阪野さんが「おい、モスが受付をしていたぞ!」と驚いた表情で話していた。70年代の頃は、集会場の後方でいかにも小官僚然としてパイプ煙草を燻らせていたモスだったから、それを長らく見ていた阪野さんが驚いたのも無理はない。

モスが亡くなつてしばらくした頃、「東京でモスがなぜ変わったのか」という話を佐々木成さんとしたことがある。佐々木さんは「東京ではレーニンの著作をロシア語で読む奴もいる。自分にも敵わない人物がいると感じたのかも」と言っていた。大阪では、少なくとも理論的にも弁舌においても敵うメン

リーダーシップの問題も当然のようにあっただろうが、ほとんどのメンバーが「間違いのない真実がどこかにある」と思い詰めていたような感じもあった。議論に議論を重ねていけば、やがては正しい結論に至るという幻想だろうか。現在ならずとも、少なくとも80年代以降なら、こういう膠着した議論が続くようなら、「今日のところはまとまらなかつたことを結論として、また別の日に継続議論をしようや」となつたはずだ。それだけみなが若かつた。私自身はモスとは高校時代からの付き合いで、学生メンバーが何人かいた時代には彼の自宅で会議をよくした。たぶんモスが東京に行くに際しては、家庭教師もそのまま譲られた。割りのいいアルバイトだったから、ラッキーだったとも思う。

大阪ではそれほどトラブルはなく、むしろメンバーが増えていた時期もあった。L青論争(青年同盟を存続させるか、党組織に吸収するか)では大阪は存続派の急先鋒だったから、鼻息も荒かつた。むしろ大阪が大変だったのは、それらが落ち着いてからの80年代だったのではなからうか。だから、この時代に組織加盟をし、ほどなく辞めていった人たちも大勢いた。これはモスの責任というよりも、フロントという組織自身の問題だったという気がする。それが全国的なものだったのか、フロント大阪独自の問題だったのかはよくわからないが:

### 果たしてモスは変わったのか

そのモスが「東京に行つて変わったらしい」と噂が飛んできた。阪野さんも涌井さんもそのことを書いているが、私の記憶

## 筆者からの便り

去年の『先駆』12月号で「江川弘・人物伝」を書きました。資料がデンと送られてきたので、これは大変!!と思いながら、2回読み直し、2週間で書き終えました。毎日書いたわけでもなく、1日2~3時間でしたが、「読む」ことはあつても、「書く」ことはなかつたので肩、腕、腰が痛くなりました。それよりも辛いことは人物伝を載せてもらったはよいが、新潟ではあの内容を理解できる人が皆無のことです。Aさんも、Bさんも部分的にしか理解できないでしょう。今年も「残りの命」の限り、ガンバります。

蓮沼 勝男

大阪編 8

ユニークにして破天荒な教員群像

丹羽 通晴

大阪で活動していた教員3人を紹介する。いずれも私よりかなり年長ながら、長期間にわたって共に行動や苦楽をともにした人たちだ。高校時代から活

動していた私にとって教師というのは慣れ親しまない職種だったはずが、彼らはあからさまに教師らしい風貌と教師らしからぬ言動で、周囲に笑いや明る

さ、活動的な活気を振りまいてくれた。ただし、教員時代の議論などについては、彼らは教員細胞に集って議論していたから、そのあたりの論争や人となりなどはあまり知らない。むしろ、教員を退職して以降に親しく付き合ったというイメージが強い。

自治会室に怒鳴り込んできたので、校庭に連れ出し、「今では酔っ払っても口にできないほど気恥ずかしいことを話した。」そうしたら「よっしゃ、わかった」と二つ返事で自称「前衛」に入った。以来、森さんには「単細胞」という不名誉な称号がついたが、森さん自身はこの称号を気に入っていたそうである。

森 起佐太

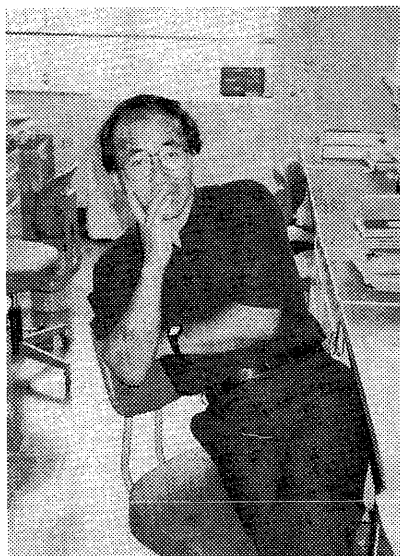
紆余曲折の進学と就職

格し、ようやく学生となった。これは森

1937年、大阪で生まれる。高校時代(18歳)、国体で剣道の大阪代表に選ばれる。20歳で大阪府大農学部合格するも入学せず、車の免許をとって各種セールスに従事し、友人たちと関西車輛販売KKを立ち上げる。24歳のときに神戸大学に合

さんの遺稿・追想集『起佐太』(2002年刊)の「略歴」からの抜粋。

大学は小寺山氏と同期(3歳年長だが)で、氏の回想によれば、「森は、典型的な



体育会系で、右翼的な学生だった。デモやストをやるたびに

大学卒業してからも変転が続き、最初に浪速高校に赴任するも、組合結成をしたかどで臆首される。続いて府立阿倍野高校に専任講師となるが、府の教員採用試験で不合格となり、阿倍野高校では時間講師に格下げ、さらに肺結核となつて高校を退職する。その後、兵庫県職員組合の書記などを経て、3度目の

府教員採用試験で合格となり、きちんと教師になったのは68年、31歳だった。大阪市立此花工業高校に赴任するが、この頃には全国で反戦闘争・学園闘争が噴出し、森さんもその渦中に飛び込むことになる。

のだ。ただし、高校生の彼らが活動上で森さんの影響を受けたかというところでもないらしい。此工にも反戦教師は5、6人以上いたというし、彼らにとつては同期や先輩などの影響のほうが大きかったと思う。

短かった退職後の活動だった:

此花工業高校は70年前後には反帝高戦の拠点のひとつになっていた、「諸経費不払い運動」などは当時の『先駆』にもよく闘争報告が掲載されていた。高校生運動が華やかだったこの頃、ほとんどが進学校だったなか

森さんはその後、府立大正高校、府立池田北高校に赴任して、98年に定年退職。退職後も3年ほどは池田北高で講師を務めてきた。完全に仕事から自由

た。パソコンを使いこなすことについては、誰よりも森さんが早かった気がする。選挙応援をすると同時に、その報告文をパソコンで起こし、さらにあちこちにメールを飛ばす。この当時、私はパソコンやメールとは無縁

文学青年だった」と聞かされて驚いた記憶がある。彼が亡くなったときに、神戸大学新聞の懸賞小説応募に「ある工員の死」が入選したことを誰かが思い出し、それが遺稿・追想集発刊の契機になった。

で、此工闘争はユニークな性格を持っていた。生徒の親は低所得層が多く、生徒自身もアルバイトは当然のことで、欠課や欠席も多かった。だから闘争課題も思想状況よりも実際の生活を反映していた。私と同世代の場合、400人が入学して、180人しか卒業できなかったと聞いた。「諸経費不払い運動」は、彼らにとって切実な課題だった

になったのは2000年2月、63歳になっていた。そして、市民新聞『ACT』のポランティアスタッフとして、八面六臂の活躍を見せる。箕面市長・市議選、泉南市議選、尼崎市議選、茨木市議選、神戸市長選…。自宅からスクーターを走らせ、取材と同時にポスター貼りやポスティングなどを精力的にこな

この晩年に文章家となった森さんだが、教員時代はまるで文章とは無縁だった。『先駆』(この当時はブランケット版)に尻を叩かれて、やっとの思いで当時の高校現場の実情を書いたのだが、それを同僚たちに配布してオルグしまくったのは、さすがに森さんの面目躍如であった。小寺山さんから「あいつは

01年5月、腰痛を訴えて入院。当初はギックリ腰といわれ、やがて腰椎圧迫骨折といわれ、最終的に多発性骨髄腫というガンだと診断された。確かな会議後の飲み会の際に「腰が痛い」と言っていたのを思い出す。遺稿・追想集に掲載された一子夫人の「つきそいの記」は入院9カ月の記録で、原文は9万字

にも及んだが、遺稿・追想集では半分以下に縮めざるを得ず、

原文は小部数だが別刷りで近い人たちに配布されたようだ。

教師を退職して、『ACT』で自在に文を書き、楽しそうに走り回っていた森さんだから、思わぬ闘病はまことに辛かったと思う。ご本人もだが、これをきっかけに親しくなった若い人たちにとっても、「気のいいおじさん」があつたという間にあの世に行ってしまったのだから、後悔は尽きない。ただ、こればかりは仕方がない…。

## 『先駆』2月号を読んで

にわかに昨年12月に政府が安保関連三文書を閣議決定してから、今年に入って1月9日から15日の日程で、G7の議長国として岸田首相がG7広島サミットに参加する主要5カ国（フランス、イタリア、イギリス、カナダ、アメリカ）を歴訪し各国

首脳と慌ただしく会談した。新たな軍事関連三文書とは「国家安全保障戦略」「国家防衛戦略」「防衛力整備計画」だ。

まさに、戦後の軍事政策の大転換と軍事費を増税でまかなうとすることが閣議決定だけで強行した状況の中で、『先駆』2月号が手元に届いた。

朝日健太郎氏の主張は良しとしても、抗議のデモや声明を写真入りで掲載する工夫を感じ

た。市民の怒りや政権へ声を上げ行動へと繋げる紙面構成を期待したい。

次に、兵庫県の山中小恵さんからの「高齢社会を見つめ、自ら実践する」の投稿記事は、写真入りで奮闘ぶりが伝わってくる。取組みの紹介と共に「抱えている問題点―今考えていること」は、山中さんの思いが伝わってくる。

また、野本美子さんの「新春短歌」は、世の中をよく観察し、的を射た名人作。時折に誌面への登場を期待したい。

最後に、興味深く読んだのは、「評伝・飛鳥井雅道」。安藤紀典氏の「自由民権運動をめぐって」のページだ。

私の住んでいる新潟県上越市

でも明治14年頃から自由民権運動が盛んになったことで以前から関心を持っていた。憲法を制定し国会を開催すること、集会・出版・言論の三大自由を要求する建白書を決議し元老院に提出する運動の表舞台に青年民権家が現れた。

その後、頸城自由党を結成し東京や長野からも参加して高田郊外の金谷山で200余名を集めた「運動会」を開くまでになった。しかし、明治16年3月、裁判所と警察が引き起こした謀略事件「高田事件」で長きにわたって停滞させられた歴史があつた。再度、光を当てたいと痛感した。  
(佐藤忠治)